レオ　イヤ伯爵――（歩廊の陰り暫時躊躇して）それは御自分が物試しに、彼女が年端も行かぬを幸ひ、操を破ったとの事でムらう。若し左様ならば。――

クラ　フム、貴殿の御思召は推量致した。若し某が既に手出を致したなら、それは最早某を良人と思ひ込みて、其意に任せたと御意なされ、さて娘御が罪咎を、かき消さうと遊ばさるゝでムらう。乍去某に於ては、露猥りがましき詞を以て、誘はうなどゝは致しませぬ。たゞ〳〵兄の妹に於ける情愛を盡した迄でムりまする。

ヘロ　妾とてもたゞそれだけ、外に何ぞけしからぬ様子を致しましたか。

クラ　其様子といふがけしからぬ。いて思ひ知せて呉れう、先づ汝が様子と云はゞ、月の面の其様にいさぎよく、苔の花の清らかげに見ゆれど、一皮下は、彼の邪淫のウヰーナス女神も、及ばぬ程の艶めかしさ。美食に

飽きて爲す業もなき獣が、情慾に身を焦すも汝程てはよもあるまい。

ヘロ　其様な根もない事を御意なされるとは、郎君には、何うぞ遊ばしたのてはムりませぬか。

クロ　公爵殿には、何故默って御出なされまする。

ベド　さればとて何を申さう。大切の我が友を、賣女風情に押付けやうと致した罪、面目もない次第てムる。

レオ　不思議に堪へぬ此御話、夢ではないか。

ウロ　夢てはムらぬ、悉く實事てムる。

ベア　ハテ祝言の席とも見えぬ此場の様子。

ヘロ　えゝ事實ぢやと――おゝ何とせうぞいな。

クラ　コレ、レオナト殿、貴殿は夢ぢやと御疑ひなされども、此處に立つは

某ではムらぬか、これなるは公爵ではムらぬか、これなるは公爵の弟御ではムらぬか、又これなるはヘロー殿の顔ではムらぬか、我等が眼は我等のものではムらぬか。

レオ　如何にも左様でムるが、さて如何致した次第でムる。

クラ　御娘御に一言御尋ね申したい事がムる。何卒貴殿より、父たる御威嚴を以て、正直に返答致さるゝやう、御命じ下されい。

レオ　コリヤ、ヘロー、其方は我子なりや、有の儘に御返答申せ。

ヘロ　おゝ神も御助けあれ、何たる憂目を見る事ぞいなう——して御尋ねとあるは、如何なる御訓べでムりまする。

クラ　卿の名を全うするやう、正直の返答を致させうとの事ぢや。

ヘロ　妾の名はヘローではムりませぬか、誰が如何なる惡口を加へうと、

虚言僞言を申さずば、此名を汚す事が成りませうや。

ララ　イヤ、御手前がそれを致す。ヘロー殿自身こそ、ヘローといふ名に、見事泥を塗り付けられた。開かれよ、時は夜前、十二時と一時の間に、卿が寢室の窓より顔を出し、談話を致したは如何なる男ぢや。まだ處女といふが定ならば、返答致せ。

ヘロ　其様な刻限に、男と詞を交はしなどは致しませぬ。

ベド　ハテ其様な虚言を申さるゝ上は、愈よ處女でないに極まつた。——モシ、レオナト殿、氣の毒ながら御話し申さむ。何を隱さう某は、愚弟並に此伯爵と三人にて、昨夜丁度其刻限に、御愛女が一人の怪しき男と、御寢室の窓にて御談話ありしを、見聞致してムるが、件の男は蕩兒の本性、かゝる事を恥ともせて、是迄とても幾度といふ數もなう、密かに

逢引致せし由を、誇り顔に高言致し居りました。

ジョ　言語同斷、何と申樣もムらぬ、口に出すも憚りあり。げに如何なる言語にても、申せば耳の汚れてムる。――さて〳〵御息女、情ない御擧動をなされましたな。

クラ　おゝヘロー殿、せめて卿が顏貌の半分程、御心の中が美しうムったなら、天晴な女子でムったらうに。乍去今はこれまて、美しうて即て汚ないヘロー殿、たをやかな多淫女多淫なたをやめ、さらばてムる。卿故には、此後戀の門を閉ぢ、眼に邪推の眼鏡を懸け、其美しさも悉皆毒ぢや刺ちやと思ひなし、浮かれ心は起すまい。

レオ　えゝ此父が胸の中、寧そ一思ひに刺殺されて死にたいわい。

とこれにてヘロー悶絶する

ピー　コリヤどうなされましたヘロー樣、何卒其樣に御伏しなさる。

ジョ　いざ歸りませう方々、此樣な密事を明るみへ持出され、それて悶絶致したと見えました。

とドン・ペドロー、ドン・ジョン、クラウヂオ及び從者等退場

ベア　さて、ヘロー殿には如何なされました。

ピー　どうやら絶息の御樣子――早う伯父君――ヘロー樣、ヘロー樣えなう――伯父君――ベアヂック樣――僧正樣。

レオ　おゝ死の神も、今は其手を御引あるな。土の蓋こそ、此樣な恥辱に、望んてもない被蔽物てあらう。

ピー　如何てムりますヘロー樣。

フラ　確乎なされ御息女。

レオ　どうぢや氣を取直すか。

フラ　取直さいて何と致さう。

レオ　何と致さう、ハテ今は萬物悉く、此奴が恥辱を責むるではムらぬか。此奴が頰の紅に、證據の見えた伯爵の物語を、辯解く辭はよもあるまい。――蘇生るなヘロー、又と眼は開くまい。是程の恥辱を物ともせず、容易く死なぬと見屆けたなら、此父が口づから、其方の罪を責め立て〳〵生命を取らうぞ。想へば其方は、樫の實の一粒種、常々造化の神の子寶を、惜ませ給ふを嘆きしが、今は其方一人さへ持て餘す、おゝ如何なれば、たゞ一人の子を持って、それを只管いとしいとは見たりしか、これが慈悲深き手を以て、乞食の胤とも知らず、門の棄兒を育て上げ、それ故家門に泥を塗られたともあるならば、如何なる浮名を流さうと、

「某の知る所にあらず、由緒も分らぬ親の胤より、流れ出た生恥辱」と申しても居られうに、悲しや某が實子でムる、二なきものにいつくしみ、賞めそやし誇り立てた實子でムる、これ故には、ふりゆく我が身の上をも忘れ、只管成人を唯一の樂みと致せし實子でムる。如何なれば其實子が――おゝ娘は汚濁の淵に沈み果てました。今は大海の水を以て洗ふとも、彼の汚れはよも落ちまい、大海の鹽を以て漬くるとも、彼の肉の腐りはよも留まるまい。

ベテ　先づ〳〵其樣に御騷ぎなされな、某などもたゞ〳〵驚き入ったる此始末、何と申さう詞もムらぬ。

ビー　おゝこれは、ヘロー殿には、誰ぞの計略に騙けられたのでムりませう。

ベテ　ピートリース殿には、昨夜御一室に御寢なされたのではムらぬか。

ピー　凡そ此一年程、毎夜さ御一緒に寢みましたが、昨夜に限り別室に、伏せりまして厶ります、

レオ　愈以て疑は厶らぬ、それこそ、既に金箍て括めたものを、一厝動きの取れぬ樣に、致したと申すものて厶る。彼の公爵兄弟が、虚言を申されうや。まして彼のクラウヂヲ殿は、思ひしめたる婦人とあって彼女が不貞の罪を數へながら、涙に呉れた程ては厶らぬか。此上は御介抱御無用、何卒此まゝ死なせて下され。

フラ　先づ〳〵愚禄の詞を御聞きあれ、今迄事の成行に任せ、密かにヘロー殿の御樣子を窺ひ居りし此愚禄、幾度となう差來る臉上の紅は、忽ち無垢を表す、天人もどきの純白にけおされて、眼中に輝く焰の光は、操を疑ふ公達が詞の誤謬を、燒かむとするにも似たる風情を、おぼげ

ならず見屆けました。此婦人に限りては、よしなき人の勘違ひ故に、跡形もなき嫌疑を受けられたに相違ム らぬ。若し此推量が違ったなら、以後は愚禄を阿呆とも云はしやれ。萬卷の書を讀み、浮世の鹽を嘗めて、時ひ得たる此胸の智識をも御信用あるな。さては愚禄が齡の功をも、僧正の役目をも、覺え得た經文の眞諦をも、一切はかなきものと御蔑みあれ。

レオ　僧正の御詞ながら、よも其樣なことは厶りますまい。此上は犯しゝ罪を蔽はむとして、僞誓の罪を重ねぬが、娘に取りせめてもの善根で厶りまする。娘は彼の物語を云解かうとは致しませぬ。然るに何故貴僧には、既に明白の事實をば、かにかくと云黙めむとはなされまする。

ヘロー　ヘロー殿、御嫌疑を受けられた、男と申すは誰で厶るな。

ヘロ　嫌疑を懸けた御當人は御承知の上でムりませうが、妾は少しも存じませぬ。處女の身で、御交際致せるだけは格別、それより上に親しう致した男などがムりましたなら、此身は奈落に墜ちませう。――おゝ父上様、若し此妾が、時でもない時、男と物を云換はし、取別け夜前、如何なる人とも、詞を交はし合ったといふ、證據が少しでもムりましたなら、此身を即刻御勘當なされうとも、憎きものに思召し、責めさいなんで、御手に懸け遊ばさうとも、少しも御無理とは思ひますまい。

フラ　如何にもこれは公達が、何ぞ思ひも寄らぬ勘違を爲されたのでムらう。

ベテ　去乍彼の御兩所は、至って名譽を重んずる君子でムる。苦し此事に就き、間違ひを致されたなら、大方それは彼の異腹のジョン殿が、計略に懸けられたのでムらう、いつもながら、善からぬ事共を、たくらまるゝ仁でムる。

レオ　某は左様の事は存じませぬ、たゞ御兩所の御詞に相違なくば、此手を以て、娘は八つ裂に致しまする。若し又彼の御詞故、無疵の娘に疵がついたら、ハテ其時は、如何なる權門勢家なりとも、思ひ知らせる事がムる。老たりと雖も、まだ血の氣は乾きもせず、智惠さへ未だ惚も致さず、及ばずながら、多少の資財もあり、不肖ながら、頼るべき知己朋友に、事は缺かぬ此某。いざと云はゞ勇を奮ひ智を起し、財を撒き友を集ひて、我に仇なす奴輩に、辛き目見するは容易い事でムる。

フラ　いや暫く、此儀に就ては、此愚僧に御任せあれ。公達には、御息女を御絶命と見たるまゝ、御歸館なされたが、茲は暫く御息女を人知れぬ處

へ御隠まいなされて、表面は御死去と御披露あれ。さて御追善の式を御營みなされ、御先祖代々の墳墓の上には、追悼の銘を御掲げなされ、其外何でも、葬送の儀式一切を、懇ろに御營みあれ。

レオ　左すれば、如何樣に相成りまするな。何故さやうな事を致しまする。

フラ　ハテ首尾克く參れば御息女の爲め、浮世人の讒謗を、哀悼に換へまするわ――これ即ち幾分の利益でムらう。乍去此かる異樣の計略を致すに就て、目的はこれればかりではムらぬ。此苦計に依て、更に大なる利益を產出さうと致す。考へても御覽あれ、嘲弄罵詈に堪へやらで、即座に死亡致されたとあらば、之を聞く人々の心は何うムらう。悼みつゝ、悔みつゝ、罪許しつべき念を致さるゝでムらう。ハテ、ある時はありのすさびに惡かりし者も、亡くてぞ人は戀しき習ひ、我有と見し中は、さま

てにも見えざりし妻心の、今は世になきものと思へば、一際立勝れて見ゆるものでムる。クラウヂヨ殿とても其通り我手荒き詞故に、約束の姫を殺せしと聞かば、坐ろに偲ばるゝ生前の俤、楚々として人を動かす、美しい目鼻立が、生けるが如く心中の眼に浮び出て、而かも生前實生の姿より、一しほ美しう見ゆるでムらう。左あらば彼君とても、苟も心の底より、姫戀しいと思ふが定ならば、よしや心中には姫が有罪を疑はぬとも、悼み嘆きに、先きの手荒を悔ゆるでムらう――ともかくもかやうに致して御覽あれ。さらば必ず愚裕が、推量がてら申すよりも、遙かに好い成行を見るでムらう。縱令何事も、意の如くは參らずとも、既に御息女は亡き人の數に入れりと思ふ心を、世間の人々に抱かせなば、御身持の善惡を、彼是とは申させますまい。さて又それさへ

思ふ樣にもならぬとあらば、口さがなき浮世人の眼も口も邪推も讒謗も及びのない、浮世離れた尼寺に行ひ濟まして、一生を送らせ申すが、結句不幸な御身分に、相應はしくはムるまいか。

ペテ　レオナト殿、こゝはいかにも僧正に、御任せあるが宜しうムらう。御承知の通り某は、公爵幷にクラウヂヨ伯とは、並々ならぬ仲てムれど、此件に限つては、屹度貴殿に御味方致し、誓つて口外は致しますまい。

レオ　愁嘆遣る方もない此某、如何なる仰にも從ひませう。

フラ　早速の御承諾滿足にムる。此上は早速、其振に斗らひませう、非常の病には、非常の療治をも致す習ひ——さらば御息女、聽て御蘇生あらむまで、暫く假に亡き人の數に御入りなされ。今日の御祝言も、大方は暫時の日延、聽て又改めて、式を擧げらるゝ事てムらう。御心を鎮めて、ぢつと御辛抱が肝要てムる。

とフランシス僧正、ヘロー、及びレオナト退場ペテヂックと
ビートリース後へ殘る

ペテ　さてビートリース殿、如何なされました、今迄泣いて入らせられましたか。

ビー　仰せの通り、又此上にも、暫らく泣くてムりませう。

ペテ　某は御同意を致し兼ねる。

ビー　貴君には、泣くべき理由もムりますまい。人樣の御同意故泣く妾てはムりませぬ。

ペテ　御從妹の君には、必定濕衣てムりませう。

ビー　其濕衣を乾して賜はる御方もあらば、どのやうにか、嬉しい事てム

りませうに。

ペテ　それ程の心中は、御覽にも入れませうが、何ぞ方法がムるか。

ピー　何でもない事でムりますれど、それ程の御方がムりませぬ。

ペテ　してそれは、男の身に叶ふ事でムるか。

ピー　イヤ男でなうては叶はぬ事、乍去貴君には叶ひますまい。

ペテ　今更何を隱さう某は、此世の中に卿程いとしい者はないと思ひ居ります。何と不思儀ではムらぬか。

ピー　不思議とも不思議、恰然——何と申して宜しいやら——先づ此世の中に郎君程いとしい者はムりませぬと、此姿が申す樣なものでムりませう。乍去これを眞實と思召すな、尤も佯言を申すのでもムりませぬ、心の中を申したのでもなければ、申さぬのでもムりませぬ——

たゞ〳〵へロー殿が何共不憫でなりませぬ。

ペテ　これ〳〵、ピートリース殿、刀の手前戯言は申さぬ、卿は某を御慕ひ下さるな。

ピー　滅多に御刀を引合に御誓なされな、後で其御詞を食まれぬやう。

ペテ　イヤ刀の手前、卿は某を御慕ひ下さる、さて又某は卿を御慕ひ申す、これを虚言ぢやと申す者には、此刀を食ませませう。

ピー　其御詞を御食みなされるのてはムりませぬか。

ペテ　其樣なものは、つけて食ふ藥味を持合はせませぬ、イヤ實正某は、卿をいとしう存ずる。

ピー　おゝそんなら神樣も御許しあれ。

ペテ　とは又何不調法を致された。

ピー　好い時に御引留下されました、丁度妾も、郎君を御慕ひ申す心の中を、申上げうと存じた處。

ベ子　然らば御遠慮なう仰せられい。

ピー　心底妾は、郎君を御慕ひ申しまする、とばかり外には、何を申上げう様もムりませぬ。

ベ子　然らば何ぞ某に御用を仰せ付けられい、某も心中を御覽に入れう。

ピー　そんならクラウヂヨ殿を討って下され。

ベ子　イヤ、そればかりはどうあっても。

ピー　さう仰有るは、此妾を討たるゝも同然。さらば妾はかう參りまする。

ベ子　暫らく〳〵　ピートリース殿。

とピートリース又立ち去らむとするをベ子グック腕を取りて

引留むる

ピー　身躰は御引留めなされても、留まらぬは妾の心、――（ともぎ放さむと爭ひながら）妾を慕ふとはいつはり――コレ喃離して下され。

ベ子　（尙ほ引留めながら）ピートリース殿――

ピー　妾はかう參りまする。

と引きちぎるやうに離れる

ベ子　何はともあれ、先づ〳〵仲直りを致しませう。

ピー　妾の敵は討たいて、仲直りを致されうとは笑止な。

ベ子　何と、クラウヂヨ殿は卿が敵でムるか。

ピー　いかにも、妾が血族の女子を、讒訴嘲弄致し、散々に辱かしめた、大惡人ではムりませぬか。――えゝ此身が男になりたや喃――いざ祝言

といふ時迄何げなき素振でおびき寄せ、滿座の中で罵詈高言、誰憚らぬ耻しめ樣。――おゝ此身が男なら、人の群がる市場の中で、クラウヂヲが胸を喰裂きたい。

ベ子　これ〳〵、ビートリース殿――

ビー　窓から顏を出し、男と密談致したなどゝ――ようも〳〵其樣な事を。

ベル　イヤ喃ビートリース殿

ビー　いとしのヘロー殿――あらぬ讒訴を受けられた、計略に懸けられた。一生廢人になられたかい喃。

ベ子　申し、ビートー――

ビー　公爵の伯爵のとは善い御名前。ほんに公爵の御立會て、伯爵の讒訴とは御立派な事。乍去、想へば其伯爵も、隨分とお甘い殿樣と見える。おゝ此妾が男なら、さらずばせめて妾に代り、男らしい擧動をせられう御方があったなら、どのやうに嬉しからう。とはいへ、男氣は流れて追從となり、勇氣は融けて世辭となる今日此頃、男は輕薄な舌の饒物。心にもない虛言を云つて、誓文立てする殿原が、當世のハーキユレス（巨人）と立てらるゝ。――イヤ如何程望めばとて、此身が男にはようなれぬ、一生女て泣き暮しませう。

と行きかゝる

ベ子　イヤ暫く、ビートリース殿、某卿を慕ひ申すは實正でムる。コレ此手に依って誓ひませう。

ビリ　眞實妾をいとしう思召さば、誓詞三昧は後にして、外に其御手の使

ひ途がありさうなものでムりますな。

ベテ　然らば卿は心より、彼のクラウヂヨ伯にはヘロー殿に、なき名を負はしたと思召すか。

ビー　少しもそれに相違はムりませぬ。

ベテ　宜しうムる、御引受申した。クラウヂヨ殿へは某より、早速決闘を挑みませう。先づ其の御手に接吻致して、さて今日は參ると致さう。おゝ此御手に對しても、クラウヂヨには辛き目を見せずには置きませぬ、何卒此後は某の名を御聞ある毎に、必ず思ひ出して下されい。いざヘロー殿を慰めて進らせられい。某は暫く彼の君頓死の赴を申し居りませう。さらばこれにて。

と二人退場

第二場——牢獄

ドッグベリー、ヴァーヂス、及び書役（シーコール）各官服にて登場同じく夜番の者共コンラード及びボラチチを引立て登場

ドッグ　何と、これで人數は揃ったな。

ヴァ　おゝ御書役に床几と布團を持てい。

書役　して犯罪人は何れてムる。

ドッグ　（書役の犯罪人と云へる語を誤解して）即ち某とこれなる同役てムる。

ヴァ　如何にも其通り、我々兩人吟味役を仰付けられてムる。

書　イヤ其吟味を致さうずる咎人は何れに居るな。早々御目付役の前へ罷出てい。

ドッグ　げに〳〵、身共の前へ罷り出でい。

（コンリード、ボラチヲ、ドッグ、ベリーの兩人ドッグベリーの前へ引出さる）

――其方の名は何と申すぞ。

ボラ　ボラチヲと申す。

ドッグ　何卒御記しなされ（書役に）――ボラチヲと申すか――して其方の名は（コンラードに）

コン　某は士でムる、名はコンラードと申す。

ドッグ　御記しなされ――士コンラード、して其方達は、常々神を信心致すであらうな。

コン　ボラ　其心得でムる。

ドッグ　御記しなされ。――兩人とも神を信心の心得ぢやと申す。――乍去神といふ字を先へ御記しなされ。かやうな惡者の名の後へ、神を据ゑてはなりますまい。――さて其方達は、既に惡人と申す事は知れてある、軈て證據を擧げうぞ、どうぢや其方何と辨解はあるまい、

コン　イヤ我等は左樣の者ではムらぬ。

ドッグ　イヤ口賢い奴ではある、此度は其方のを詮義致して呉れう。――コリヤ其方（指す）罷出でい、一言申聞ける事がある、其方は惡人ぢやと人が申すわ。

ボラ　イヤ我等は左樣の者ではムらぬ。

ドッグ　退り居れ。――イヤ兩人共同じ事を申し居る。――御記しなされたか――兩人共惡人ではないと申す。

書　お目附には、御吟味の致し樣が違ひまする。夜番の者共を御呼びな

され、申立人は彼等でムる。――夜番の者共罷出でい。――お

ドッグ　いかにも〳〵、それが早道でムる。

〳〵罷出たか、公爵殿下の御名に依って申付ける、御身達はこれなる兩人の罪科を申立てい。

番甲　これなる男が、公爵の舍弟ドン・ジョン様には、惡人なる由を申しまして　ムりまする。

ドッグ　お記しなされ。――ドン・ジョン様惡人――ハテ公爵の舍弟を、惡人呼ばりは、いかにも大逆でムる。

ボラ　御目附役に申上げます――

ドッグ　ヤイ〳〵　默り居らう、身共は其方の目附が見るも厭ぢや。

書記　（夜番に向ひ）其外にも何事か申したか、聞き居つたか。

番乙　其外へロー姫の讒訴を申して、ドン・ジョン様から千兩の禮金を取ったと申し居りました。

ドッグ　類希なる叛逆でムる。

ヴァ　八幡、其通りでムる。

書　又其外には。

番甲　クラウヂヲ伯には、其讒訴を眞實と思ひ、滿座の中でヘロー殿を辱かしめ、祝言は破談に致すと申されたと申居りました。

ドッグ　おゝ大惡人、此故には未來永劫、焦熱地獄へ落つるでムらう。

書　又其外には。

番乙　これだけでムりまする。

書　してこれだけは、何と其方達（罪人を指す）も辨解はなるまいが。ドン・ジョ

ン樣には、今朝密かに御行衛知れず。ヘロー殿には、其通りの讒訴を受け、其通りに破談を致され、其悲みの故に頓死なされた。――此上は御日附役には、兩人に本繩打ち、レオナト殿の前へ御引きなされい。某はこれより一足御先へ參り、吟味の次第を、一應御耳に入れ置きませう。

と書役退場

ドッグ　物共、兩人に手錠を下せ。

ヴァ　國法に從ひ所刑を致さう。

コン　退れ馬鹿者。

ドッグ　此奴が〳〵、書役は何處に居る、役人を馬鹿者呼ばり、記して置きたい。――やァ〳〵繩を打て。――此横道者奴が。

コン　退け〳〵、阿呆。

ドッグ　此奴身共の役柄を蔑に致すか。老體の身共に對し無禮な奴。――書役が居らいて、身共を阿呆と記さぬが殘念な。――乍去方々、身共は阿呆ぢやと申された事を御忘れあるな。帳面には載らずとも、身共を阿呆呼ばゝり記臆えてゐれ。えゝ此奴無作法者、役人に對し無禮な擧動、證人は幾らもある。コレ聞け身共はな、阿呆ではなうて隨分賢い男、剩さへ役人ぢや。其上立派に一家を支へ居る、先づ此メッシナの市では、餘り人に劣らぬ男の片端、國の掟をも存じて居る、相當に小金も持って居る、昔はこれで全盛な生活も致した老爺、此樣な役服も二襲ね、其外何でも好い物は、身に着けて所持致す。――えゝ其奴を引立てい。――思へば〳〵、阿呆と帳面につけられなんだが殘念なわい。

と一同退場

第五幕

第一場——レオナト家庭内

レオナト及びアントニオ登場

アン　其樣な御愁傷は、我から我身を傷はるゝと申すもの。愁傷に御身を委ねて顧みぬは、賢明の沙汰とは申されますまい。

レオ　イヤ其諫言立、措いて呉りやれ、身共が耳へは篩に水て詮もない、最早一切云うて呉りやるな。誰が何と申して呉れうと、身共同然の不幸者ならばいざ知らず、其外の者の詞は耳にも入るまい。先づ此樣に愛しい娘を持ちながら、其娘を、はや愛しいとも申されぬ、不幸な父親を連れて參て、其者の口より勘忍の講義を聞かせるが宜い、何點から見

ても、此身共に寸分違はぬ因果な身て、寸分違はぬ愁傷の種を持つ男が、莞爾笑つて鬚を撫で、愁傷三昧措け〳〵と申さるゝならば、それは如何にも陳めかしい忠告で愁傷を忘れ、書物の講釋て身の不幸を紛らしも致さう。——いやさ其樣な男があらば、同道致して來やれ。其者の口より勘忍の講釋承はらう、乍去左樣な者はムるまい。コレ弟、自ら嘗めざる悲みにこそ、やれ忠言やれ慰問とひしめけども、一度其悲を嘗めたる者は、忠言はさて置き、先づ胸迫り氣屈するばかりであらう。大患を舌三寸の藥て治め、狂亂を一條の絹絲に擊ぎ、惱み痛みを取留めもない口端の慰問で、制へうと思ふは、皆な自ら悲みの眞味を味はぬ故の事ぢや。愁嘆に暮るゝ者に、忍べ堪へよと勸むるは、皆人の爲す所なれども、さて自身同樣の愁嘆に逢ふ時は、如何程高德堅忍の君子

なりとも、忍耐の講釋ばかりは致されぬもの。それ故先づ〳〵其諫言立は、措いて呉りやれ、身共が愁傷は講釋では治まらぬ。

アン　其樣な事を仰せられては、大人も小兒に變りはムらぬ。

レオ　イヤ云うて呉りやるな。――身共は畢竟血肉の塊ぢや。ハテ如何に講釋上手の哲學者でも、書いた書物を見る時は、人間を超絶れて、神にでもなつたやうな口をきゝ、何事も運命と、此世の苦難を物ともせぬげに見ゆれども、よも歯痛を默ってはよう堪へまい。

アン　せめて難儀を御一人で、背負ふ事だけは御止めなされ、我身に仇なす者共にも、幸い思ひを致させるが、宜しくはムらぬか。

レオ　それは尤な事を云やる、いや身共も左樣に致す所存ぢや。身共は何とやら、ヘローの罪は寃罪のやうな氣分が致す。就ては先づ第一にク

ラウヂヲ、それより公爵、又凡てヘローを辱かしむるに就き、力を協せた輩に、うむと思ひ知らせて呉れう。

アン　いや公爵とクラウヂヲが、遠たゞしげにこゝへ參じました。

ドン・ペドロー、及びクラウヂヲ登場

ペド　これは御兩所。

クラ　これは〳〵御兩所。

レオ　ヤア方々に申すことがムる。――

ペド　レオナト殿、吾等は少々取急ぎまする。

レオ　少々御取急ぎがムると。――ハテ然らば御出てなされ。――今日に限り、左樣に御取急ぎてムるとは。――イヤどうても宜しい。

アン　イヤ滅多に吾等へ。喧嘩買は御慎みなされ。

アン　其喧嘩故に、恐兄の足元が明るくなれば、誰ぞ外に、罪に伏す者があるてムらう。

クラ　然らば誰ぞ御合兄に、あらぬ凌辱を加へた者がムるとな。

レオ　誰ぞ、兄下こそ某を凌辱致したてはムらぬか。えゝこゝな僞君子が——（クラウヂオ佩劍の上に手を置く）コレ刀に手を懸けて何とめさる、身共は貴殿を恐れは致さぬ。

クラ　コリヤ誤つた。年寄られた貴殿に、思ひも寄らぬ心配を懸けましたが、某がかう刀に手を措いたは、意有ての事ではムらぬ。

レオ　ヤイ〳〵、身共を嘲弄致さるゝな。老いたりと雖も此身共は、老齢を楯にして、やれ若い時にかやうの事を致した、やれ若ければかうもせう、あゝもせうなどゝ、取留もない繰言は申さぬ。コリヤ、クラウヂヲ、よう聞け、足下はようも〳〵、潔白な身共が息女、併せては身共迄を、凌辱致し居つたな。其返報には、老いも衰へもかなぐり棄て、白髪頭に萎び腕で相手を致す、刀の勝負で黑白を別けて呉れうず。返す〳〵も足下は無垢な娘に、讒訴の傷を附け、其傷故に、娘が胸はずだ〳〵にさいなまれ、祖先の墳墓へと逃げ込んだ。想へば其墳墓には、遂ぞ今迄塵程の汚名をだに葬りしことはなかりしに、足下が奸計故に娘一人が此始末。

クラ　某の奸計故に。

レオ　おゝさ足下の奸計故に。

ベド　老兄、それは御勘違ひでムる。

レオ　イヽや違ふか違はぬか、證據は勝負に見せて呉れう。縱令足下が、何れ程劍道の修業を積み、剩さへ若年血氣の身であらうと、身共の相手

を承諾く上は、屹度思ひ知らせて呉れる。

グリ　イヤ其御相手は御免でムる。

レオ　其樣に逃げ廻るか、二才殿。既に娘を殺した足下、此上某を殺さば、初めて男一匹を殺すと申すもの。

アン　イヤ兩人共殺されませう、さすれば立派に男二匹でムる。乍去、それは兎も角もと致して、先づ一人を殺させませう。――サア〳〵某を御討ちあれ――イヤ某が相手を致す――いざ御出あれ二才殿、いざいざ御出あれ二才殿、足下が武道を打破つて呉れう。かく申す身共も士なりや、浮の空には申さぬ。

レオ　コレ弟――

アン　先づ御默りめされ、某も二なく愛した一人の姪。其姪が悪人の讒訴

故に非命の最期、某とても此儘にはなりませぬ。イヤ彼の二才殿の分際で、男一匹に刃向ふとは、蛇の顰にわれから手を入れるも同然。ヤイ〳〵二才殿、猿殿、阿呆殿、大言殿、乳臭殿――

レオ　コレ〳〵弟、アントニー――

アン　先づ御控へめされ、イヤ某はよう彼等を存じ居ります、彼等に何れ程の貫目があるか、寸分違はぬ所まで承知致す。――意地汚なく厚顏しく、それで化粧に浮身を窶す青二才、欺く、嘯す、嘲る、誹る、無い事を申す、又道行く時は道化た素振を致して、偉さうな容子を粧ひ、間がな隙がな愚人嚇の文句を吐く。イヤ此樣な二才に、眞劍で敵を倒す事などは如何な〳〵。ハヽア、先づざっと此樣でムる。

レオ　乍去コレ、アントニー――

アン　マヽ、何うでも宜しい、御構ひなさるな、某に御任せあれ。

ペド　御兩所、某等に於ては、縱令何と仰せられうと、成るべく御意に忤らひますまい。御息女の御最期、何共御氣の毒な事でムる、乍去誓文御息女に對し、吾等より申立てたは、跡形のない事ではムらぬ。寸分紛れのない、充分證據のある事でムる。

レオ　コレ公爵殿〳〵——

ペド　イヤ何と仰せられうと、某は最早聞く耳持ちませぬ。

レオ　聞く耳持たぬ——ヤア弟此方へ來い、話がある——何條聞かせずに置くべきか。

アン　聞かせいて宜いものか、此まヽに致したなら、吾等に罰が當りませう。

ペド　御覽あれ、吾等が尋ぬる、當の主が參られた。

ペチヂック登場

クラ　ヤア、ペチヂック殿、御變りもムらぬか。

ペチ　これは公爵。

ペド　ようこそペチヂック殿、少し早いと、喧嘩の引分役を、勤めらるゝ所てムった。

クラ　イヤ我等はも少しの處て、二人の齒のない老人に、此鼻を嚙み切らるゝ處てムった。

ペド　外でもない、レオナト兄弟の爲めにぢや。貴殿は何と思召す、若し吾等が戰ふたなら、若輩の吾等には、少々手に餘した事てムらうな。

とレオナト、アントニオ退場

ベッ子　義我にあらざる戰にては、眞の勇氣は出ぬてムらう。某は御兩所を御尋ねに參りました。

クラ　吾等も貴殿を尋ねて、彼方此方を彷徨ひ居りました所、いかう氣分が勝ぐに依ってわっさりと胸を晴したい。貴殿の頓知を御聞かせ下さるまいか。

ベッ子　某の頓知は鞘の中に納めてムる、いて拔きませうか。

ベド　何と、貴殿は頓知を腰に佩して、ムるか。

クラ　イヤ腰に佩すものはムりますまい――それは兎に角、伶人への注文ではないが、鞘の中に納めてムるならば、慰みに一つ拔いて御聞かせて下され（伶人への注文に拔いて聞かせよとは弓か鞘より拔き出して胡弓を鳴し聞かせよとなり）

ベド　八幡ベッ子ヂック殿には、只ならぬ御顏色、――モシ貴殿は、何處ぞ御不

快でもムるか、但しは御腹を立てられたか。

クラ　何と確乎なされ、愁傷は猫を殺すと申す諺はムるとても、貴殿には愁傷を殺す程の元氣があるてはムらぬか。

ベッ子　頓知の槍を以て、御相手をせいとならば、如何にも御相手は致しませう。――乍去其樣な御話は、先づ御止め下され。

クラ　然らば御敗北か、別の槍を進ぜませう、今のは折れたさうな、

ベド　ヤア益す變る御顏色コリヤ眞實御立腹でムらう。

クラ　果して然らばベッ子ヂック殿には、暄嘩の挑戰法をよう御存知て入らせらるゝ。

ベッ子　貴殿に一言、密かに申入れたい事がムるが如何でムる。

クラ　南無三決鬪の申入れてはムるまい。

ベチ　ヤイおどれ悪漢――イヤ冗談に申すのてはムらぬ――場所、時刻、武器は貴殿の御心任せてムる、黒白の判定を勝負て極めたい――此願ひを御聞濟みなくば、某は貴殿を臆病士と申し觸す。ハテ貴殿は、貞淑の一婦人を御手に懸けられた、報いは覿面、貴殿の身の上に落つるてムらう、此上は委細の申合せを致したい。

クラ　如何にも御相手を致しませう。定めて結構な御馳走が出る事てムらう。

ベド　何と御酒宴でも致さるゝか。

クラ　如何にも忝ない事てムる、ベネデック殿には某を御招ぎ下された。御馳走には小牛の頭や、閹雞やら、（小牛の頭閹雞何れも愚人を意味するもの）但し某に其切り分けが巧者に出來ぬとあれば、ハテ其時は、某が刀は、伊達に持つものと思召されい――モシ、ベネデック殿、序に山鳴（これも愚人）の御馳走も出るてムらうな。

ベチ　御ゆたかな頓知てムる、如何にも易々とよう出る事ぢや。

ベド　イヤ頓知と云へば此間は、ビートリース殿が、貴殿の頓知を評されてゞムる。御話し申さう、先づ某が、貴殿は精緻い頓知を有たるゝと申したりや、彼の婦人には「ほんに細かい小さい頓死ぢやと云はれた、某が「いや至って大きい頓死てムる」と申せば、「仰の通り大ざっぱな頓死」ぢやと云はるゝ。「いや誠に善い頓知てはムらぬか」と申せば、「痛くも痒くもない故、人の氣に逆らう事もない、誠に善い頓知とは彼れてムらう」と云はれた。「イヤ全躰彼の君は器用者てムる」と申したりや、「誠にもうお悧根者」てと云はるゝ。「諸國の言語を一枚の舌て遣ひ分けられる」と申せ

ば「いかにも左樣でムりませう、今夜或事をかうぢやと仰せられたと思へば、翌朝は又さうではないと仰せられる。一枚の舌を幾枚にも遣ひ分けられる事と見えまする。」と云はれた。さてこの樣に凡そ一時ばかり、何でも貴殿の取柄々々を、散々に惡口せられましたが、其癖終局には吐息を漏しながら、とは云へ此廣い伊太利中にも、彼の樣な好もしい殿御は、又とあるまいとはコリヤ何うぢや。

クラ　そして、心から泣かれましたが、但し妾は其樣な事は何うても宜いと云はれました。

ベド　いかにも其樣に云はれた。乍去さうは云ひながらも、若し心から憎うなかったなら、死ぬ程愛しく思ふてムらう――これは悪くへロー殿から聞いた話でムる。

クラ　いかにも悪くへローから、且つ又。

ベド　それはさうと何時になったら、ベヂック殿の額の上に、牛の角を生やす事が出來るでムらう。

クラ　そして其下に「ベヂックが成れの果て、女房持」と書いて見たい事でムる。

ベヂ　某はもう參ります、某の心は早や御判明でムらう。後で御勝手に御しやべりなされ、どうで貴殿方の輕口は、惡人の振廻すなまくら刀、身に泌みる程の事はない。――申し公爵從來の御厚情、改めて御禮を申す、乍去今よりは、御側を離れねばなりませぬ。御庶弟ドン・ジョン樣には、メッシナの市を御逃亡、貴殿方の御計らひにて、罪もない一人の淑女を御殺しなされた。又クラウヂヨ殿には、何れ改めて御意得たい、先

づそれ迄は御無事で御在あれい。

とべチ退場

ペド　冗談かと思へば眞面目でムる。

クラ　甚だしい眞面目でムる、これも畢竟、ビートリースへの戀故でムらう。

ペド　して貴殿に決鬪を申入れた。

クラ　如何にも心から出た樣子。

ペト　人間も彼の樣に、身躰に衣服は着けながら、心は分別の下紐を解いた所は、何と阿呆らしうはムらぬか。

クラ　身躰は狒猴よりも大きうムるが、狒猴に冠とは彼の事でムりませう。

ペト　乍去暫く御待ち下され――一寸こゝで一思案致さずばなるまい。何と某の舍弟が、逃亡致したと申したでは、ムらぬか。

ドッグベリー、ヴァヤス及ひ夜警の者共コンラード、ボラチオを引立て登場

ドッグ　サア來い〳〵、正義の神樣の御所刑が、其方風情に馬鹿にされたら、最早御秤器（正義の神は秤器を手にすと信ぜらる）で、善惡の目盛はなされまい、イヤサ一旦惡い惡黨を働いた上は、滅多に此繩は弛められぬ。

ペド　コリヤ何うぢや、舍弟奴の家來二人を縛って參った、一人はたしかボラチヲであったな。

クラ　兩人の罪科を御尋ねあれ。

ペド　コリヤお役人、其者共は如何なる罪科を犯しましたな。

ドック　御聞あれ、此者共は先づ虚構の妄語を發しました、其上不實を申しました。又第二には他人の繼訴を致しました。最後に去る婦人に、なき名を負はせました。又第三には跡方もない證據三昧を見せましてムる。さて結局惡むべき虚言吐てムります。

ペド　然らば某も尋ねる事がムる、先づ此者共は、第一に如何なる所業を致した、第三に此者共の罪科は何とでムる。最後に何故此者共は捕縛致された。さて結局御身等は、如何なる罪を此者共に擬てまするな。

クラ　イヤ妙々、向ふの論法を其儘遣って、只一っの意義を、それ〳〵に云ひ分けられた。

ペド　其方共（ポラ、コンニ人に向つて云ふ）は、此樣に捕縛致さるゝとは、誰人に對して如何なる所業を致した。此御目附役には、除り聰明博識に渡らせらるゝ

に依って、吾々には御詞が判明致さぬ、ハテ其方共の罪科は何とぢや。

ポラ　御前樣、此上は手短かに申上げませう。一通り御聞きなされた上、此私は、それなる伯爵の御手に懸けて御殺し下され。私は今迄御前樣の御目をさへくらまして居りました。御前の御聰明を以て、尚ほ御心附き遊ばされぬ所を、この薄惚の役人奴等に、ふと發見されましてムる、と申すは時刻も丁度眞夜中頃、これなるコンラードと某が、御舍弟ドン・ジョン樣に頼まれて、ヘロー樣の繼訴を申したと、内談致し居る所を、折惡しく此奴共に、立聞致されました次第でムります。尚ほそれに就き、御前方を庭先へ誘ひ寄せ、私が情婦のマーガレットに、ヘロー樣の衣服を着けさせ、逢引致す所を、御目に懸けた一條、又祝言の當日には、御前方に於て、ヘロー樣に滿座の中にて、耻をかゝせやうなどゝ、

仰せられた一條を、漏れなく申聞け居る所を、悉く立聞いて、證據に取られました、アヽ今更瓏曝らしに、此樣な事を申上げうより、寧そ早う死んで惡事の蓋を致したうムります。聞けばヘロー樣には、私並びに私主人の幾訴故に、御果てなされたとやら、此上は何も申しませぬ、たゞ惡事の報いを待つ計りでムりまする。

ペド　ハテ此の話を何と御聞きやる、熱鐵が血潮を通る思ひではムらぬか。

クワ　某は只だ〳〵、毒を飲まされるやうな心地でムりまする。

ペド　して某の舍弟奴が、それを其方にさせたと申すか。

ボウ　其通りでムります。又其報酬には、大分の御金を下されました。

ペオ　虚偽で固めた男とは、彼奴の事――さては此惡事故に、逃亡致した

「ペドロ」ハテ此話を何と御聞きやる熱鐵が血潮を通る思ひではムらぬか

「クワラ」某は只だ〳〵毒を飲まされるやうな心地でムりまする

のぢや。

クラ　さても懐かしのヘロー殿、今こそ卿が伊は、愛しい昔の艶やかな姿をして、我が目の前に浮ぶぞよ。

ドック　サア〳〵罪人共を引立てた、今頃は書役殿が、レオナト様に、事の次第を申上げたであらう、此上は方々（ヴアーヴス及び夜番の者共を指す）都合次第で、此身共が阿呆呼はり致された事を、忘れずに言上致して呉りやれ。

ヴア　さういふレオナト様と書役殿が、丁度此處へわせられた。

レオナト、ブントニオ及び書役登場

レオ　ドレ何奴が其悪黨ぢや、後學の爲め、其奴の眼附を見て置きたい。此後其様な男に逢うた時の用心に致す。さて何れが其奴ぢや。

ボラ　御迷惑を懸けた男を見たいとならば、此私を御覽なされませい。

レオ　さては口端を以て、身共が罪なき娘を殺した横道者は其方よな。

ボラ　いかにも此私一人の所業でムる。

レオ　イヤさうではあるまい、其方は、まだ虚言を申すな、見やれ此處に御立ちある御二方は、世にも希なる立派な御ッ方、後一方は張本人で御逃亡。――申し御兩所、ようこそ娘を御殺し下された、改めて御禮を申す。御兩所が氣高い難有い御擧動を以て、娘が碑銘を御記し下された。げに見事な御所業でムる、よう御考へあれば、御合點の參る筈。

クラ　ハテ何と申して、御聞入を願うたもの、乍去、兎も角も一言申上げねばなりませぬ。外でもムらぬ、此報いには、某の身躰を御隨意に御處分下され。某の罪科に對しては、如何なる所罰をも、御遠慮なう御下し下され。但し某の此度の所業は、全くの間違から、更々心あって、致した事ではムりませぬ。

ベド　某とても實正其通りでムる。乍去これなる老兄の、御氣の濟むやうに、とならば、御勝手の御處分に少しも不服は申しますまい。

レオ　さればとて、娘を生かして還せとも申されぬ――それは叶はぬ事ぢや、乍去今は御兩所への御願ひ、此メッシナ市の住民へ、娘は無實て死したる由を、御兩所より御告げ下され、さて又眞實娘をいとしき者に思召さば、彼女が爲めに、一扁の弔文を御案じなされて、それを墳墓の上に懸け、且つ御口づから、それを御讀誦なされて、彼女が骨に御聞かせ下されい。――明日とも云はず、今夜の中に御聞かせ下され。――さて明朝館へ御出あれ、最早某が婿とは致されねど、せめては某が甥と致したい、と申すは某が舍弟の娘に、不思議にも姿形死したるヘロー

に生寫しながムる。して此娘は、吾等一家の唯一の相續人でムるが、クラウヂヨ殿には、之をヘローと思召して、御添遂げ下されい。さらば某が怨みは、それて消えませう。

クラ　おゝお見上げ申す御心根、餘りの御厚誼に、思はず、涙が溢れまする、謹んで御指圖に從ひませう、此後とも、此クラウヂヨが一身は、貴殿の宜しき樣に、御任せ申しまする。

レオ　然らば某は、明朝貴殿の御出を御待ち申す。今夜はこれで御別れ申さう——さて此惡黨奴（指す）は、マーガレットと突合せて、對決を致させう。彼奴も大方、公爵の御舍弟にかたらはれた、一つ穴の貉でムらう。

ボラ　イヤ、彼のマーガレットに限っては、左樣ではムりませぬ。彼が彼の夜某と密談致したも、當人に於ては、何も知らずに致した次第でムります。

私の承知致す限りに於ては、彼のマーガレットは、少しも邪な事は致しませぬ。

トック　申上げます、書役の帳面に控へてはムりませぬが、これなる惡黨犯人には、某を指し阿呆と申しまして、ムりまする、御所刑の砌には、何卒此儀御含み願はしう存じまする、尙ほ又夜番の者共が漏聞きました は、此兩人の談話中、さる癖物の噂を申したげにムりまする。此癖物と申すは、片小鬢を結んで下げ、其端に鍵とやら錠とやらをぶら下げ、御經の文句を振廻して、乞食を致すとか申しまする。——既に永年かやうに過し來りましたげにムりまするが、當世は追々人の心も、せゝこましうなりましたに依って、中々御經の文句でも、物を惠む者はムらぬと申しまする。何分此儀に就きても、御糺明遊ばされるやう願ひます

る。

レオ　其許がかにかくとの配慮忝ない、役目柄大儀々々。

ドッグ　天道の難有さを御忘れなき御志、殊勝な若者同然で入らせられる。これも誰故神故と、御禮を申上げまする。

レオ　此れは其許への御禮でムる。（謝金を與へしなり）

ドッグ　難有うムりまする。

レオ　さらばこれなる犯人は、慥かに某が預かり申す、忝ない。

ドッグ　さらば一大罪人を、御前の御手許へ御預け申しまする。何卒他の者の見せしめに、御手づから嚴しく御處分あらせられい。此上は、神よ御前を御護りあれ。某は只管、御前の御息災を祈りまする。おゝ神よ御前を御無事に御護りあれ。いざ謹んで御暇を申上げまする。又後日神の御許を以て、御面會の折もムりませう。――サア〳〵御同役。

（ドッグ、ベリー、ザアダス及夜番の者共退場）

レオ　御兩所さらば、明朝御待ち申す。

ベド　必ず參上致しまする。

クラ　今夜はヘロー殿の、追善に過ごすてムらう。

（ドン・ペドロー及びクラウヂオ退場）

レオ　卿は此奴共を引立て下され。これよりマーガレットに逢ひ、如何なれば此横道者奴と、馴れ染むるには至りしか、其邊篤と糺して參らう。

（一同退場）

第二場――レオナト家庭園内の一部

ベッ子及びマーガレット別々に登場

ベッ子　御願ひぢや程にマーガレット殿、和女の取持ちで、ビートリース殿に面會せて下され、御禮には何の樣な事でも致さう。

マー　そんなら一首歌を詠んで、姿を賞めそやして下さりますか。

ベッ子　いかにもマーガレット殿、如何なる當世男も、脚元にも寄りつけぬ程、巧妙な句調で詠みませう。イヤ眞實和女は其樣な美女でおぢやる。

マー　何と、如何なる當世男も寄り附かぬ、それでは何時迄も此姿は、下女奉公で暮しませうか。

ベッ子　イヤ敏捷い頓知ぢや、獵犬の口と申すもので、直ぐに捕へる。

マー　劍術遣ひの木刀と申すもので、打っても傷は附けぬ、なまくら頓知の、貴君樣とは違ひまする。

ベッ子　それが男らしい頓知と申すもの、女には一切傷を附けぬ。それ故何卒、ビートリース殿を呼んで下され、楯は和女に進ぜる〳〵（楯か進ずるとは一本樣つたとの意）

マー　寧そ劍を下さりませ、楯は姿共にもムりまする。

ベッ子　イヤ和女は楯の遣ひやうを御存じか、先づ螺旋細工で、眞中へ槍の穂先を、一本挿入まねばならぬ、（昔時楯の中央に長さ五六寸の槍の穂の如きものを挿入し巧き螺旋細工にて取外し出來るやうになしありしとぞ）仔去總じてそれは、處女達には至つて險呑な道具でおぢやる。

マー　そんなら、ビートリース樣をお呼び申しませう、大方お脚があるでムりませう。

ベッ子　それ故屹度此處へ御出なされう。

とマーガレット退場ベッ古き小唄を口吟む

唄　天なるや戀の神、
　　我が身の上は知ろし召す知ろしめす、
　　如何に拙き此身にや――
但し拙いは唄の上、戀にかけては――海を泳ぎ越したレアンデル、媒介の神に取持たれた、トロイ國のトロイラス、其外數多き昔の色男、唄浄瑠璃に名も高い人々たりとも――はて彼等と雖も、身共の樣にかう戀に心を碎きはせまい。實正身共は、歌で此心を云盡すことは叶はぬ。隨分幾度も試みたなれど、身共には、どうも善い韻字が見當らぬ。偶ま見付くれば、悪にもつかぬ、さては延喜でもないたわ言ばかり、イヤ身共は歌詠星の下に生れなんだと見える。又外處行の詞で、戀人を口

說くなども致されぬ。

ビートリース登場

ビー　おゝビートリース殿、某が呼べば御出下されますな。
ベッ　又往ねと仰有る時は直樣往にまする。
ビー　おゝ必ず、御歸りなされと申す其時迄御在あれ。
ベッ　「其時」は其の御詞で過ぎ去りました、さらば直樣御暇申しませう。とはいへ、往ぬる前に、わざ〳〵こゝ迄參つた、其用事を申しませう。外でも厶りませぬ、貴郎とクラウヂヲ樣の間には、何の樣な事が厶りましたか。
ベッ　只今の處、たゞ汚ない詞を替はし合うたばかりで厶る、それに就き今日は、卿に接吻致さねばならぬ。

ピー　汚ない詞は汚ない風、汚ない風は汚ない息、汚ない息はさて厭なものの、それ故、接吻は眞平、此まゝ御暇申します。

ベテ　イヤ卿の頓知の凄まじさ、談話の筋道を追退けて仕舞った。先づ事明かに仔細を申さねばならぬ、クラウヂヨ殿には、某が決闘の申入れを聞入れた、此上は何れ彼方より改めて挨拶がムらう、さもなくば某より、彼奴を卑怯者と吹聽致す筈、さてかうなれば、承りたい事がムる、外でもないが、不束なる此身の、何處が御氣に召して、卿は某を御慕ひ下さる。

ピー　全躰が氣に入りましてムります、誠によう御不束な所ばかりが、しっくりと重なり合うて、不束ならぬ所を、何處に指かう隙もない。さて又貴郎は、妾の何處が御氣に召して、妾故に戀に御惱みなされます。

ベテ　戀に惱むとは面白い御詞、某は實に戀に惱みます、意ならずも卿を戀ふる者でムれば。

ピー　厭と思ふ心を壓しつけながらも、御慕ひ下さるのでムりませう、なりや可愛相なは貴郎の心、貴郎が妾故に、其樣に壓つけ遊ばすとなら、妾も貴郎故に、此上壓しつけて進ぜませう、貴郎の御惱み遊ばすものを、妾に愛む事はなりませぬ。

ベテ　お互に餘り賢しうて、戀をさへおとなしくは出來ませぬな、自分で賞める賢人には、二十

ピー　其御詞では、餘り賢しうも見えませぬ、自分で賞める賢人には、二十人に一人も、眞の賢人はないものぢやと申します。

ベテ　それはまだ、世の中が溫厚な、昔々流行った話、今の世は、我と我が墓標を、生前に建てゝ置かねば、死ぬるが最期、葬式の鐘の音、後家の泣く聲

が止むと思へば、忘られ果つるてはムらぬか。

ピー　して其後家の泣く間は、凡そ何れ程と思召す。

ベ子　それが考へ所てムる――先づわめき立つる間がざっと一時、涙に暮るゝ間が、凡そ其四半分でもムらうか。夫れ故苟にも賢しいと云はるゝ者は、心に疾ましいと思はぬ限り、例へば此某の樣に、我と我が賢しさを、大鼓をたゝいて、吹聽致すが德用てムる。さて眞實賢しいに相違のない某が、手前賞は先づ此だけに致して、ヘロー殿の御機嫌は如何てムるな。

ピー　どうも御氣色が勝れませぬ。

ベ子　然らば卿の御機嫌は。

ピー　同じくどうも勝れませぬ。

ベ子　先づ信心を第一に、次に某を愛しみ、そして御快氣なされませ。某はこれにて參る、誰ぞ遽たゞしう來る者がムる。

ウルスラ登場

ウル　ビートリース樣、伯父君の御召でムります、イヤもう大騒ぎ、ヘロー樣の御寃枉が晴れました、公爵樣クラウヂヲ樣には、全くお騙まされ遊ばして、彼の樣な事をなされました。何事もドン・ジョン樣の惡計、尻が割れて御逐電、何卒直樣御出遊ばしまし。

ビー　貴郎も御出なされて、仔細を承はらうではムりませぬか。

ベ子　卿の胸に思はれて生存へ、卿の懷に抱かれて往生し、卿の目の前で葬られう某、何處へなりと、御同道申しませう。

と二人退場

第三場――レオナト家墳墓（寺院内）

ドン・ペドロー、クラウヂオ及び從者等樂器と燭を持ち登場

クラウ　レオナト家の墳墓はこれてムるか。

從者　左樣でムります。

クラウ　（一卷の卷物を取出し追悼の吊文を讀誦す）「あはれ〳〵、さがなき人の口の端に、非命の死を遂げしヘロー姫、此墳墓の下に眠り給へり。さはれ死の神も、今は姫が無實をあはれがり給うて、給ふるに不死の名譽をもてしぬ、あはれ辱かしめられて失せし命、死してとはの名譽に蘇生りぬるぞうれしき」

さて之を墳墓の上へ懸けて置かう。

と件の卷物を墓の上に掛けながら

此某が亡き後迄も、姫が名譽を永久に讃ぜよや。――さらば伶人達、樂を奏して、讃美の歌を歌うて下され。

歌

貞操の女神ダイアナ、あはれ願はくは御廣前に仕ふる處女一人を、屠りし者共の罪宥させ給へ。處女の墳墓を廻り〳〵、追悼の歌歌ひつれて、悔ひつゝぞ嘆く樣の哀れなりや。あはれぬば玉の闇も共に嘆け、呻めき悲みの聲をだに添へよかし、あな哀れ〳〵。あはれ墳墓は顯を開きて、一度呑める亡者を吐け、さらば貴き神力もて、不思議の蘇生もなどかなからむ。あなあはれ。

あなかしこ。

クラ　さらばヘロー殿、これにて卿が骨に御暇申さむ。――此後とても、年に一度は、必ず詣でとぶらひ申まむ。

ベド　早や夜も明けしぞ、燭を消し給へ人々、餌を漁る狼も、今は穴に潜みつらむ、日輪王が御聲の、出現も遠からじ、東の空は早や横雲たなびきて、灰色の斑を色どりたり、太儀なりし人々、早や引取り給へ、さらば。

クラ　おさらば人々、各々宿元指して御歸りあれ。

ベド　さらばグラウヂヲ殿、これより參りて服を改め、さてレオナト許參ると致さう。

クラ　此度こそは、ハイメンの神（結婚を司る女神）も、何卒此樣な悲しうない、目出度い喜び事を御授け下され。

と退場

第四場――レオナト家の書院

レオナト、アントニオ、ベネディック、ビートリース、マーガレット、ウルスラ、フランシス僧正及びヘロー登場

フラ　さればこそ、ヘロー殿に罪はないと申さぬ事か。

レオ　公爵、クラウヂヲ殿の御兩所とても、御聞の通りの間違から、彼の樣な申立てを致されたとあれば、同じく罪はムらぬ。たゞマーガレットに於ては、たとひ心あってにはあらずとも、幾分咎むべき點がムるは、審問の成行の上に明かでムる。

アン　いかにも、萬事此樣に判明致し、喜ばしい次第でムる。

ベネ　某とても御同樣、此樣な事に相成らずば、誓言の表に對し、是非とも

クラウヂヲ殿と、一勝負致さねばならぬ所でムりました。

レオ　此上は娘を始め、女子達一統は、一緒に奥へ往んで居やれ。後に身共が招んだなら、覆面を着けて出て來るのぢや。さて丁度公爵、クヲウヂヲ殿御兩所が、尋ねて參らるゝ約束の刻限ぢや。——

と婦人一同退場

して弟、卿の役目を忘れまい、ヘローの假父となって、彼をクラウヂヲに遣すのぢやぞよ。

アン　見ん事致して退けませう、顏色にも露す事ではムりませぬ。

ベア　時に僧正、某も貴僧の御手數を、願はねばならぬ事がムりまする。

フラ　してそれは何でムる。

ベア　と申すは、某をも縁の糸で、此浮世に繋ぎとめて下さるか、それとも

寧そ切って落すか、二つに一つを御撰び下されい。——申しレオナト殿、これは眞實でムる、貴殿の御姪子ビートリース殿には、此某を愛着の眼で御覽下されまする。

レオ　おゝ其眼は娘ヘローが、用立てたとやら申しまする。いかにもそれは實正でムる。

ベア　して又某も其返報に、愛着の眼で見まする次第。

レオ　さてはかく申す某、公爵、クラウヂヲ殿三名にての立談から、其御眼が出來たと見える、イヤそれはさて置き、それに就き貴殿の思召は。

ベア　何とやら謎のやうな御挨拶、乍去某の希望を腹藏なく申せば、某も彼君と、今日祝言の式を擧げたうムるに依って、何卒貴殿の御承諾が願はしう存じます。——僧正、貴僧の御助力に預りたいは此儀でムる。

レオ　某も其儀ならば、眞實同意てムる。

フラ　愚僧とても――おゝ公爵クラウヂヲ殿御兩所の御出でムる。

（ドン・ペドロー、クラウヂヲ從者大勢と登場）

ペド　御早うムる御一同。

レオ　御早うムる公爵、クラウヂヲ殿、御待ち受け申しました。愈よ今日愚弟が娘と御祝言下されますか。

クラ　たとひ黑奴の娘なりとも、やはか御意には背きますまい。

レオ　然らば弟、嫁御寮を招んで參られい、僧正にも御待受なされてゞムる。

（とアントニオ退場）

ペド　イヤ、ベネヂック殿、御早うムる、ハテ何故其樣な二月顏をなされてゞムる、霜が降って風が吹いて、天が曇った樣な御顏色ぢや。

クラ　ナニサ例の牛の角でも、御考へなされてゞムらう。――イヤ御心配あるな、角が生えたら角端へ金でも着せて進ぜう、昔々ジュピター神が、戀故にこそ牛になって、ユーロッパ姫をさらった時、ユーロッパ姫が甚う喜ばれたと申すが、貴殿が牛になられたなら、歐羅巴中が喜ぶでムらう。

ベ　デユピターがなった牛は、優しい聲で鳴いたと申すが、貴殿の御父君が御手飼の牝牛に懸った種牛は、誠にけしからぬ牡牛とムって、何うやら貴殿に似たやうな、犢を生ませたさうにムる、ハテ貴殿の御聲が、其犢同然てムる（犢は愚人の異名）

クラ　此返禮は何れ後日、イヤものが參た

（アントニオ、狂面せるヘロー、ビートリース、及び他の婦人等登場）

さて某が、御手を取るべき婦人は何れでムる。

アン　これこそ其婦人でムるが、改めて某より進上致しまする。

クラ　然らば某の妻でムる――何と、面を見せてたもれ。

レオ　イヤそれは、これなる僧正の前にて、新婦の手を取り、結縁の誓を仰せられた上の事になされい。

クラ　然らば僧正の前にて、かう御手を取りませう。和女さへ御厭ひなくば、某は和女の夫でムる。

ヘロ　まだ存生中は、貴郎の先妻でムりました此妾（と面を取る）御心の變らぬ以前、貴郎はかく申す妾の夫でムりました。

クラ　コリヤ、ヘロー殿が二躰ムるか。

ヘロ　仰せまでもない事、一人のヘローは、あらぬ讒訴に非命の最期、乍去

かく申す後のヘローは壯健で、正しい處女でムりまする。

ベド　こりや矢っ張り前のヘロー殿ぢや、彼の死んだヘロー殿ぢや、

レオ　ヘローは確かに死に失せました、乍去それは無實の罪の、まだ消えやらぬ間でムる。

フラ　其驚きは尤ぢやが、仔細は愚僧が承知致す。祝言の式の濟んだ後で、ヘロー殿死去の次第を、詳かに御聞かせ申さむ、先づ只今は、其驚愕を御鎮めなされ、神前へ直ちに案内申さむ。

ベテ　申し僧正、お待ち下され〳〵。――さて何れがビートリース殿でムるな。

ビー　（面を取りながら）ビートリースは妾でムります、何御用でムりますな

ベテ　外でもない、卿は某を御慕ひなさるでムらうな

ピー　イヤ妾よりは、別に御慕ひ申しませぬ。

ベテ　然らば卿の伯父君、公爵、クラウヂヨ殿の御三人には、何か勘違へをなされたと見える、卿は某をお慕ひあると仰せられた。

ピー　貴郎こそ妾を御慕ひ遊ばすてムりませうな。

ベテ　イヤ某よりは、別に御慕ひ申しませぬ。

ピー　そんなら、ヘロー殿や、マーガレットや、ウルスラは、何か勘違へをなされたと見える。貴郎が妾を御慕ひ遊ばすと、誓文迄して仰せられましたに。

ベテ　三人の御話では、卿は某故に、病の床につかれるばかりぢやと承知致した。

ピー　三人の御話では、貴郎は妾故に死なぬばかりの、御重躰と承知致し

スーリトーピて跡の筆の殿クツヂヨ殿の跡が記し正くヘ子ヂツクラク
殿に當て心の詠を込み詠たれしたの心たて當に殿ムてしろ

ました。

ペチ　其様な事は少しもムらぬ。――さては卿は某を御慕ひなされませぬな。

ピー　御交際に、お慕ひ申したばかり。

レオ　いやさピートリース、さうは云っても、滿更ペチヂック殿が憎うはありまい。

クラ　ペチヂック殿とてもピートリース殿を、滿更お慕ひなさらぬ事はムるまい。其證據にはこゝに一枚の紙がムる、正しくペチヂック殿の筆の跡でピートリース殿に當てた心のたけを、詠み込まれた歌が記してムる。

ヘロ　こゝにも又此様なものがムります、これはピートリース殿の袂か

ら、密と盜んだ歌反古、紛れもない筆跡で、ベヲチック殿を慕はるゝ趣が述べてゐります。

ベヲ　不思議とも何共申樣がない。心の中はさもないに、現在我が手に相違あらざる二枚の書附。――何でもよい、某は卿を妻に致す、乍去八幡、これは卿不悶と思ふ故の心よりてゐる。

ピー　妾とても今更否やは申しませぬ。――乍去これは、進まぬ心を、勵ましての上の事でゐりますぞへ。乍憚御生命を御助け申さうの心も、手傳うてゞゐります、畢竟御生命も絶々との、御噂に迷うた上の事。

ベヲ　えゝ默りめされ、其口を塞いで呉れうず。

とベヲ、ピーを接吻する

ベド　さて如何でゐる、今こそ女房持のベヲチック殿。

ベヲ　かやうでゐる、公儀、惡口に拔目のない執拗者が雲霞のやうに集って、某を嘲弄致さうとも、やわか此志は曲げませぬ。諷刺の嘲弄のと、左樣なものに恐れを爲す某ではゐらぬ。所詮某が、一旦妻帶を致さうと思ひ立ちし上は、世間の人々が、何と仰せられうと、一向心にも留めませぬ。されば從來某が、一生獨身の高言を申したればとて、今の此身を御笑ひ御無用。ハテ變り易いは人事の常とゐるではゐらぬか、先づ某が申分はこれまで。――さてクラウヂヲ殿、某は眞實、貴殿を討果さうと存じ居りましたが、今は某とはたゞならぬ親族同志、先づは命冥加に生存へて、從妹の君を隨分愛しがって御進げなされ。

クラ　某は又貴殿が、ビートリース殿との祝言を拒んだなら、散々の躰に打擲して、いやといふ目に遇はせ、否應なしに添はせて呉れう、さてこ

そ變屈な獨身者を、浮氣者に仕立てゝ呉れうと、腕捕引いて待って居た。イヤ、ビートリース殿に、ちっとでも御汁斷がムれば、これて中々、浮氣は仕兼ぬ男でムる。

ベト　先づ〳〵お互に仲善く致さう。――それに就き、祝言の式を濟す前に、てゝは一っ舞蹈を致して、お互の氣分と、花嫁達の爪先を、輕う致して置かうてはムらぬか。

レオ　いや舞蹈は後の事〳〵。

ベア　いや某の御願、先に致したうムる、それ故囃方には、先づ〳〵鳴物を始められい。――時に公爵、いかう御眞面目て居らせらるゝ、夫方を御持ちなされ〳〵。御携帶の杖にしても、牛の角の頭を附けたが、何寄貴いものてムります。

一人の使者登場

使　御前樣、御舍弟ドン・ジョン樣御儀、御逃亡中追手の者共に召捕られ、此メッシナへ御還りなされましてムりまする。

ベア　何れそれは明日の事〳〵、某が何ぞ相應はしい、御處分法を案じ出して進ぜませう程に。――それ囃方始めた〳〵。

と一番の舞蹈ありて一同退場幕

マッチアドー、アバウト、ナッシング　終

明治四十年四月十九日印刷
明治四十年四月廿二日發行

から騷ぎ
定價金八拾五錢

沙翁全集

著作者　戸澤正保
　　淺野和三郎

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
　　大日本圖書株式會社
　　代表者
　　專務取締役　宮川保全

發賣元　東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
　　大日本圖書株式會社
　　大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
　　大日本圖書株式會社支社

大日本圖書株式會社賣販約特

村上商店。川崎。武文舍。二二堂。啟蒙堂。

林堂。水野。東京堂。林平。丸善。青野。中西屋。松村。有隣堂。中央堂。松島。大倉。金刺。北隆館。三友。

掃部屋。內田。東洋堂。文會堂。池田。東明堂。二松堂。益山房。山岸。

堂。高橋。成城。野島。西村。中山。高松堂支店。北光社。目黑。山本。柳村。越佐同盟出版部。

水野。いろは堂。尙古堂。

川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。

吉見。谷口屋。古澤。三原屋。大石。

日新堂。水琴堂。小林。朝陽館。西澤。西澤支店。雄文堂。丸山。

文堂。上野屋。

盛文堂。目向。牧野。相原。八文字屋。

若林。文港堂。松田。南波。

善。田中。三宅。石田。北村。本田。中井。竹內。

井。虎眼鏡。集英堂。

川。中村。

字都宮。近田。

武內。精華館。武香堂。原田。

精藏堂。明盛堂。開文舍。

元野木。積善館。博文社。金文堂。

長崎。作潤堂。谷。吉田。金光堂。

村上商店。川崎。武文舍。二二堂。啟蒙堂。

林堂。水野。東京堂。林平。丸善。青野。中西屋。松村。有隣堂。中央堂。松島。大倉。金刺。北隆館。三友。

掃部屋。內田。東洋堂。文會堂。池田。東明堂。二松堂。益山房。山岸。

堂。高橋。成城。野島。西村。中山。高松堂支店。北光社。目黑。山本。柳村。越佐同盟出版部。

水野。いろは堂。尙古堂。

川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。

吉見。谷口屋。古澤。三原屋。大石。

日新堂。水琴堂。小林。朝陽館。西澤。西澤支店。雄文堂。丸山。

文堂。上野屋。

盛文堂。目向。牧野。相原。八文字屋。

若林。文港堂。松田。南波。

善。田中。三宅。石田。北村。本田。中井。竹內。

井。虎眼鏡。集英堂。

川。中村。

字都宮。近田。

武內。精華館。武香堂。原田。

精藏堂。明盛堂。開文舍。

元野木。積善館。博文社。金文堂。

長崎。作潤堂。谷。吉田。金光堂。

地球堂。森江。森江分店。鐵文館。杉本。文

林堂。水野。東京堂。林平。丸善。青野。中西屋。松村。有隣堂。中央堂。松島。大倉。金刺。北隆館。三友。

掃部屋。內田。東洋堂。文會堂。池田。東明堂。二松堂。益山房。山岸。

堂。高橋。成城。野島。西村。中山。高松堂支店。北光社。目黑。山本。柳村。越佐同盟出版部。

水野。いろは堂。尙古堂。

川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。

吉見。谷口屋。古澤。三原屋。大石。

日新堂。水琴堂。小林。朝陽館。西澤。西澤支店。雄文堂。丸山。

文堂。上野屋。

盛文堂。目向。牧野。相原。八文字屋。

若林。文港堂。松田。南波。

善。田中。三宅。石田。北村。本田。中井。竹內。

井。虎眼鏡。集英堂。

川。中村。

字都宮。近田。

武內。精華館。武香堂。原田。

精藏堂。明盛堂。開文舍。

元野木。積善館。博文社。金文堂。

長崎。作潤堂。谷。吉田。金光堂。

77
69